



「能登の里山里海」と令和6年能登半島地震発生後の
1か月：世界農業遺産として価値づけられた地域資源
は発災後のX（ツイッター）でどう表現されたか
（試行的分析）

河本， 大地

(Citation)

兵庫地理, 69:143-156

(Issue Date)

2024

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489588>



「能登の里山里海」と令和6年能登半島地震発生後の1か月 —世界農業遺産として価値づけられた地域資源は発災後の X (ツイッター) でどう表現されたか (試行的分析) —

河本大地

I. はじめに

本研究の目的は、「能登の里山里海」として価値づけられてきた地域資源に対する、さまざまな思いや見方の特徴を、令和6年能登半島地震(2024年1月1日)発生後1か月のX(ツイッター)上での表現から明らかにすることである。被災地の創造的復興の一助となることを意図している。

「能登の里山里海」は、2011年6月に日本で初めて認定された¹⁾世界農業遺産である。石川県能登地域の4市5町(七尾市、輪島市、珠洲市、羽咋市、志賀町、中能登町、穴水町、能登町、宝達志水町)で構成されている。

世界農業遺産は、2002年に国連食糧農業機関(FAO)が世界的に重要な農業地域を未来へ引き継いでいくことを目的に開始した事業で、伝統的な農林漁法、伝統技術、農村文化や景観、生物多様性などを構成要素とした「地域システム」の保全が目指されている。英語では”Globally Important Agricultural Heritage Systems”であり、GIAHS(ジアス)という略称が用いられることもある。2023年11月10日現在、世界で26か国の86地域(そのうち日本は15地域)が認定されている。

「能登の里山里海」については、金沢大学、石川県立大学、国連大学の研究者らを中心に、精力的に研究や価値づけ、地域社会との協働、アウトリーチ活動などが行われてきた。それらは2011年の世界農業遺産認定の前から進められている。2006年に、地域と大学の協働拠点として、珠洲市の旧小泊小学校校舎に金沢大学能登学舎(第1図)が開設された。

2007年には金沢大学「能登里山マイスター」養成プログラム(現在は能登里山里海SDGsマイスタープログラム)が始まった。菊地ほか(2021)によると、このプログラムには能登への移住を促進する効



第1図 金沢大学能登学舎

2012年2月25日、「地域環境学ネットワーク若手ワーキンググループ『ひよこ組』能登フィールド研究会」参加時に筆者撮影。人物の顔はぼかしている。左方のビニルハウスには、「里山マイスター 施設園芸実習圃場 金沢大学 能登学舎」と記されている。

果があり、またカリキュラム内容等に対する受講者の満足度がきわめて高い。さらに2008年には、地域住民中心のNPO法人「能登半島おらっちやの里山里海」も設立され、里山里海の保全や普及啓発の活動が続けられてきた。こうした場や組織、そして活動は、課題解決型の研究推進や人材育成、そして地域づくりに大きな役割を果たしてきた(北村・宇都宮・上野 2021)。

その過程で、多くの研究が蓄積されてきた。たとえば、中村・嘉田(2010)は「里山復権」と題し、里山を再生・保全するためには人と自然をつなぐ理念や仕組み、人材が必要とし、手立てや可能性を多角的に追究した。「里海」概念についても、松田(2013)などが検討している。

「能登の里山里海」を構成するさまざまな資源についても、多くの研究がなされてきた。たとえば、渡部(2012)は、里山における昆虫をはじめとする

多様な生物と人間との共生の姿を描き出した。松下 (2014) は、輪島市西保地域の大沢・上大沢地区における間垣(まがき)に着目し、冬季の海から集落に吹き付ける強風から家々を守る伝統的な垣根のなす文化的景観に対して、地域外人材を交えた保全の可能性を探った。寺島ほか (2015) は、七尾市の熊木川流域を事例に、高度経済成長期前からの河畔景観の変化が魚類に与えた影響を評価した。池田・吉田 (2021) は、「世界農業遺産『能登の里山里海』のシンボル」(濱本 2016) とされることもある輪島市の棚田「白米千枚田」(第2図)について、文化財としての役割や観光的利用もある中で水稲作がどう維持されてきたかを整理し、課題を示した。



第2図 白米千枚田

2014年6月29日に筆者撮影。

このほか、世界農業遺産としての認定の効果をどう測るかという議論(香坂・内山、2016)や、能登半島および金沢市の住民らを対象としたアンケート調査をもとに能登半島の社会的価値と生態学的価値を地理情報として可視化し、両者を重ね合わせてSEPLs(社会生態生産ランドスケープ)のホットスポットを抽出した橋本ほか(2015)などがある。市場を介さない食品のやり取りの存在が資源の有効活用や絆の確認、親睦の深化や調理の知識・技能伝承の意欲喚起につながっている(林 2023)といった報告もある。

「能登の里山里海」を活かした学校教育実践や教材開発も数多く、ここでは詳細は割愛するが荒木・

岡村・塚脇(2015)、祐岡ほか(2016)、服部・岳野・湯地(2017)、松本ほか(2017)、服部・岳野(2019)などがある。

さらに、「里山里海」は能登地域の特徴を示すシンボリックな表現としても可視化されている。金沢方面と能登半島とを結ぶ自動車専用道路である旧能登有料道路には「のと里山海道」の名称がつけられ、能登空港にも「のと里山空港」という愛称がつけられている。のと鉄道には、観光列車「のと里山里海号」が走っていた。珠洲市を舞台とする「奥能登国際芸術祭」や、珠洲市・七尾市・輪島市の「SDGs 未来都市」認定においても、「能登の里山里海」は強く意識されている。

加えて、「能登の里山里海」をはじめとする世界農業遺産に関する国際会議の開催や、フィリピンの世界農業遺産「イフガオの棚田」への人材育成支援、海外からの視察の受入など、国際貢献・国際交流の活動も活発に行われてきた(宇野 2014; 山下 2017)。筆者自身も、2013年に国際地理学連合(IGU)の持続的農村システム研究委員会(CSRS)のエクスカーションにおいて、世界の農村地理学研究者に里山や里海の概念や実態に触れてもらうべく「能登の里山里海」を案内する一翼を担った経験をもつ(Kohmoto et al. 2013)。

このような歩みを進めてきた世界農業遺産「能登の里山里海」であるが、2021年4月~2026年3月を計画期間とする「世界農業遺産保全計画(第3期)」では、「これまで受け継がれてきた『能登の里山里海』の資源を活かした農林水産業を核とした独自のシステムが、高齢化や担い手の減少、自然環境の変化によって、保全・継承を図ることが難しくなっているという課題に対して、担い手の育成・支援や体制の強化、地域資源の磨き上げとビジネス化、価値の向上と普及啓発、ネットワークづくりと交流促進、次世代への保全・継承を図ることを基本方針とし取り組む」としている。実際、能登半島の過疎化、少子化、高齢化等は著しく進行しており、能登地域4市5町の人口は1950年をピークに2015年までに4割以上減少した(加賀 2021)。とりわけ能登半島北部にあたる奥能登地域(輪島市、珠洲市、穴水町、

能登町)の人口は、1990年～2020年だけでも約4割減少しており、集落での交流や買い物、通院といった日常の生活活動の環境維持や、祭礼・仏事など地域の文化・慣習の継続などに課題を抱えている(林2023)。

こうした中、令和6年能登半島地震(2024年1月1日)は石川県、富山県、福井県、新潟県など広域に被害をもたらした。中でも奥能登と呼ばれる珠洲市、輪島市、穴水町、能登町では、家屋倒壊や土砂災害、津波による浸水被害、地盤隆起による被害、数多くの集落の孤立などが甚大であった。これらを受け、二次避難の必要性の高まりや、住み慣れた地での生活の持続の困難化、さらには山間部・沿岸部等の集落から撤退して都市部等への集住を求める議論なども生じた。地域で生きてきた人々、地域を大切に思う人々の尊厳をも揺るがす事態となっている。

II. 方法

世界農業遺産「能登の里山里海」として価値づけられてきた主な地域資源を表す語(第1表)が、令和6年能登半島地震発生後の1か月間にSNSのひとつであるX(エックス、旧称Twitter(ツイッター))上でどのように表現されてきたかを確認する。具体的には、「能登の里山里海」の世界農業遺産認定において評価された6項目(第1表の「全体」以外の項目)に含まれる、主要な地域資源を示す語を対象とする²⁾。

ただし、本稿執筆時点では、「里山 能登」や「谷地田 能登」「白米 千枚田」「中島菜」「輪島塗」「いしる」など、「能登の里山里海」として重要な存在でありもともとはGoogleスプレッドシートでは対象にしていたにもかかわらず、入力作業ができていない検索語がある。これらは本稿の対象から除外している。また、第1表にある「生きもの 能登」「能登大納言」「キリコ 能登」「農耕儀礼 能登」「アマメハギ」「祭り 能登」「農産物 能登」については、1月1日から1月10日～15日までの間の投稿の入力しか間に合わなかった。

副題に「試行的分析」とあるように、本研究の分析手法は試行的である。また、分析に用いるデータ

第1表 検索に用いた語の例

カテゴリ	検索語
全体	能登の里山里海
	里海 能登
	satoyama noto
	GIAHS noto
■生物多様性が守られた 伝統的な農林漁法と土地利用	はぎ干し 能登
	天日干し 能登
	海女 能登
	棚田 能登
	ため池 能登
	ボラ待ちやぐら
■里山里海に育まれた多様な生物資源	シャープゲンゴロウモドキ 能登
	ホクリクサンショウウオ 能登
	イカリモンハンミョウ
	希少種 能登
	生きもの 能登
	渡り鳥 能登
	能登野菜
	能登大納言小豆
	在来品種 能登
■優れた里山景観	茅葺き 能登
	白壁 能登
	黒瓦 能登
	家並み 能登
	間垣 能登
■伝えていくべき伝統的な技術	揚げ浜式
	炭焼き 能登
	いしり (樺坂 46 いしりか関係を除く)
■長い歴史の中で育まれた農耕にまつわる文化・祭礼	キリコ 能登
	農耕儀礼 能登
	あえのこと
	アマメハギ
■里山里海の利用保全活動	祭り 能登
	農家民宿 能登
	春蘭の里
	農産物 能登
	水産物 能登
林産物 能登	
人材育成 能登	

第2表 趣旨とルールの記事

能登半島は、日本発の世界農業遺産「能登の里山里海」として価値づけられてきました。

被災地復興にあたっては、世界的価値のある地域としての尊厳を住民や関係者がもてるようにすることが大切と考えます。

そこで、「能登の里山里海」として価値づけられてきた要素が、被災後に X (Twitter) 等の SNS でどう表現されているかをまとめることにしました。

一緒に Google スプレッドシートで作業を進めたい方は、奈良教育大学の河本大地までメッセージかメールをお送りください。

その際、氏名やご所属、連絡先、参画したい理由等を教えてください。信用できる方とは編集用の URL を共有させていただきます。

今後、集まった情報を分析し、能登半島の地域づくりに資する形にしたいと考えています。

【ルール】

1. まず、「記入用メモ」タブにある検索語の中から、興味のあるものを選んでください。そしてその右に「作業中。名前」と入力してください。名前はニックネームも OK です。
2. X (Twitter) で検索します。「話題のツイート」ではなく「最新」を選び、検索欄に「検索語 since:2024-01-01」と入力してください。1/1 以降の投稿が新しい順に並びます。
3. 検索してヒットしたポスト（投稿）を、「X の投稿」タブの「内容（投稿者名と文章をコピー）」の列に、投稿者名から投稿文の末尾までコピーしてください。
 - * ポストごとに、掲載日、URL、図の有無と種類、入力者も忘れずに記してください。
 - * 「掲載日」は、古い順（1/1 から）にしましょう。ただし、同じ日の中での掲載順は問いません。適宜、行を増やして順番を整えてください。
 - * リプライ（返信）のポストも含まれます。
 - * 複数の検索語でヒットするポストもあります。入力済みであることに気づいたら、重複しないようにしてください。
 - * ポスト内にリンクがある場合は、リンクアドレス (URL) も「内容（文章をコピー）」の中に加えてください
 - * 「能登の里山里海」に関係ない内容や、公序良俗に反する内容であっても、検索語でヒットしたポストはすべて対象にします（判断基準が人によって異なるようにしたいので）。

・ X (Twitter) 以外の SNS も対象にしたいのですが、検索や整理の仕方をどうするか悩んでいます。ご提案を歓迎します。

・ ご質問やご意見・ご提案がございましたら、お気軽に奈良教育大学の河本大地までお願いします。

も、入力に困難をきたして不十分な形になっていることに留意されたい。

本研究を進めるにあたっては、多くの人と問題意識の共有を図りたいと考えた。また、結果的に本稿で対象外にした検索語があるとはいえ、作業量が多く筆者のみで作業するのは困難と考えられた。

そこで、Google スプレッドシートを用いて「【記入中】「能登の里山里海」に関する SNS 投稿」と題するシートを設け、ウェブ上で共有し、誰でも一緒に作業が進められるようにした。その際、本取組の趣旨と進め方を共有するべく、シート上に第2表に示す趣旨文とルールを記し、この部分は他者が編集できないようにした。

取組の呼びかけは、まず筆者の X (Twitter) アカウントでおこなった。下記の文章の下に Google スプレッドシートへのリンクを張った投稿をおこない、固定ポスト（固定ツイート）としてピン留めし、多くの人の目に触れるようにした。

【#能登の里山里海 にご関心のある方へ】

日本初の世界農業遺産「能登の里山里海」として価値づけられてきた要素が、令和6年（2024年）能登半島地震被災後に SNS でどう表現されているかをまとめています。

一緒に作業を進めたい方を募ります。

また、筆者が担当している 2023 年度後期の授業の受講者に、任意での作業を呼びかけた。

結果として、2月15日現在、奈良教育大学の学生4名、奈良女子大学の学生（筆者の担当している奈良教育大学との連携開設科目の受講者）1名、面識のなかった他大学の学生1名が作業に参加してくれている。

本稿ではこのうち1月分の1048投稿（ポスト、ツイート）を対象とする。これらをテキストマイニング分析ツールである「KHCoder」³⁾にかけ、要素間の対応関係の分析や、文章中に共起している語のパターンを共起ネットワーク図として図示する共起ネットワーク分析をおこなう。その際、強制抽出する語として、「能登」「輪島」「里山」「里海」「ボラ待ち」

「やぐら」「のとじま」「石川」「穴水」を設定した。標準状態で分析にかけると、これらの語が人名として扱われたり、一部の文字だけで抽出したりするためである。また、共起ネットワーク分析の設定は、原則として「KH Coder」の標準の状態のままとしたが、「強い共起関係ほど濃い線に」にチェックを入れて共起ネットワーク図における関係性の表現を強調するとともに、フォントサイズは 120% に設定して可視性を高める。

なお、Twitter の投稿（ツイート）の検索結果のデータベース化や整理・分析については、桐村編(2017)が詳しい。これに倣いたいのが、2023 年 7 月にイーロン・マスク氏によって Twitter の名称が X に変更された後、API の制限・有料化が進み、投稿（ポスト）の検索結果を自動的にスプレッドシートにまとめたり、ジオタグを活用したりするのが困難化している。

そのため本研究では、筆者がプログラミングにあまり詳しくないこともあって、スプレッドシートへの投稿（ポスト、ツイート）検索結果の入力は、投

稿内容や URL などをもひとつひとつコピー&ペーストする形でおこなっている。また、空間分析ではなく、各投稿の日付を用いた時系列の分析が中心となる。

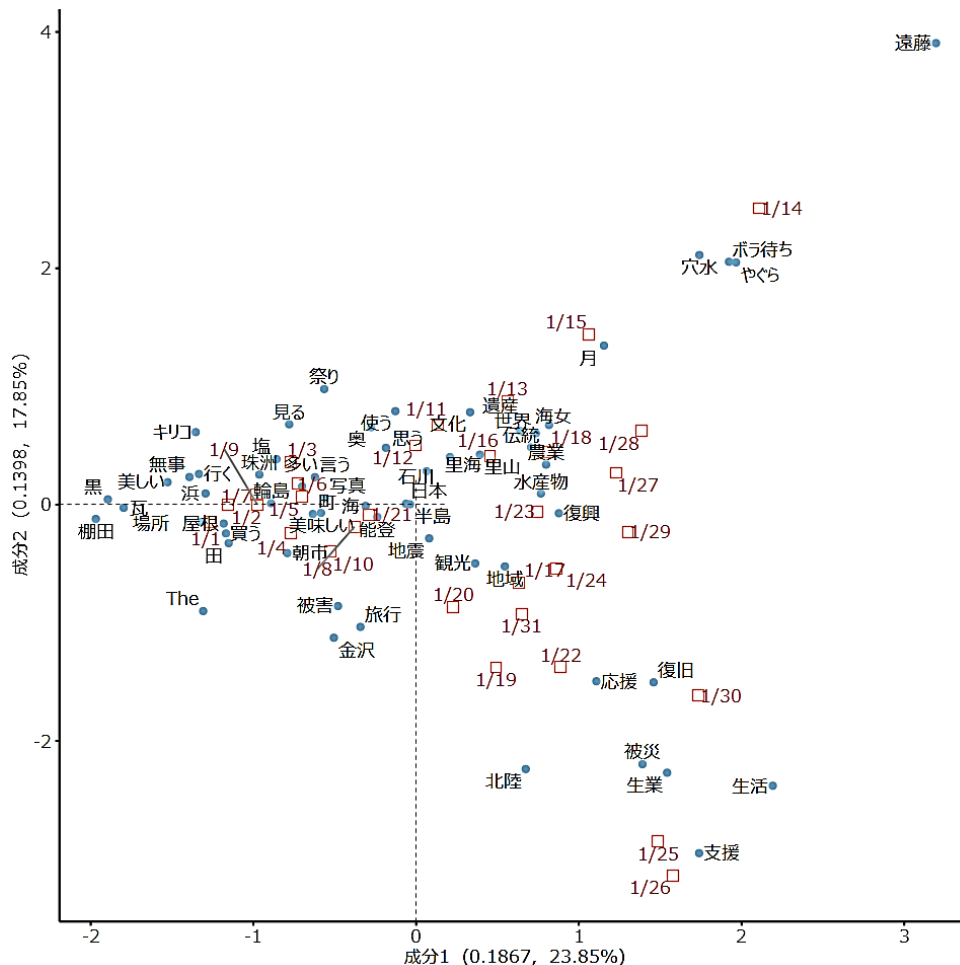
III. 結果と考察

1) 時系列でみた特徴の視覚的探索

第 3 図は、本稿が対象とした検索語と、投稿日（2024 年 1 月 1 日～31 日）との対応分析をしたものである。これを使うと、時系列でみた特徴をグラフィカルに探索できる。

成分 1 と成分 2 がともに 0 である原点付近には、1 月全体を通じて頻出していた語が集まっている。「日本」「石川」「能登」「半島」「地震」などが該当する。一方、原点から離れている語ほど、投稿日との関係でみて特徴的というように読み取る。

図の左のほうに、発災時の投稿における頻出語が並んでいる。1 月初めには、「黒」「瓦」の「屋根」や、「棚田」（おそらく多くが輪島市の白米千枚田）、「浜」などの「美しい」「場所」や「キリコ」などの



祭りに言及しつつ、「無事」を願う投稿が多いことがわかる。能登を訪ねたことのある（あるいは見聞きしたことのある）人々によるものかもしれない。

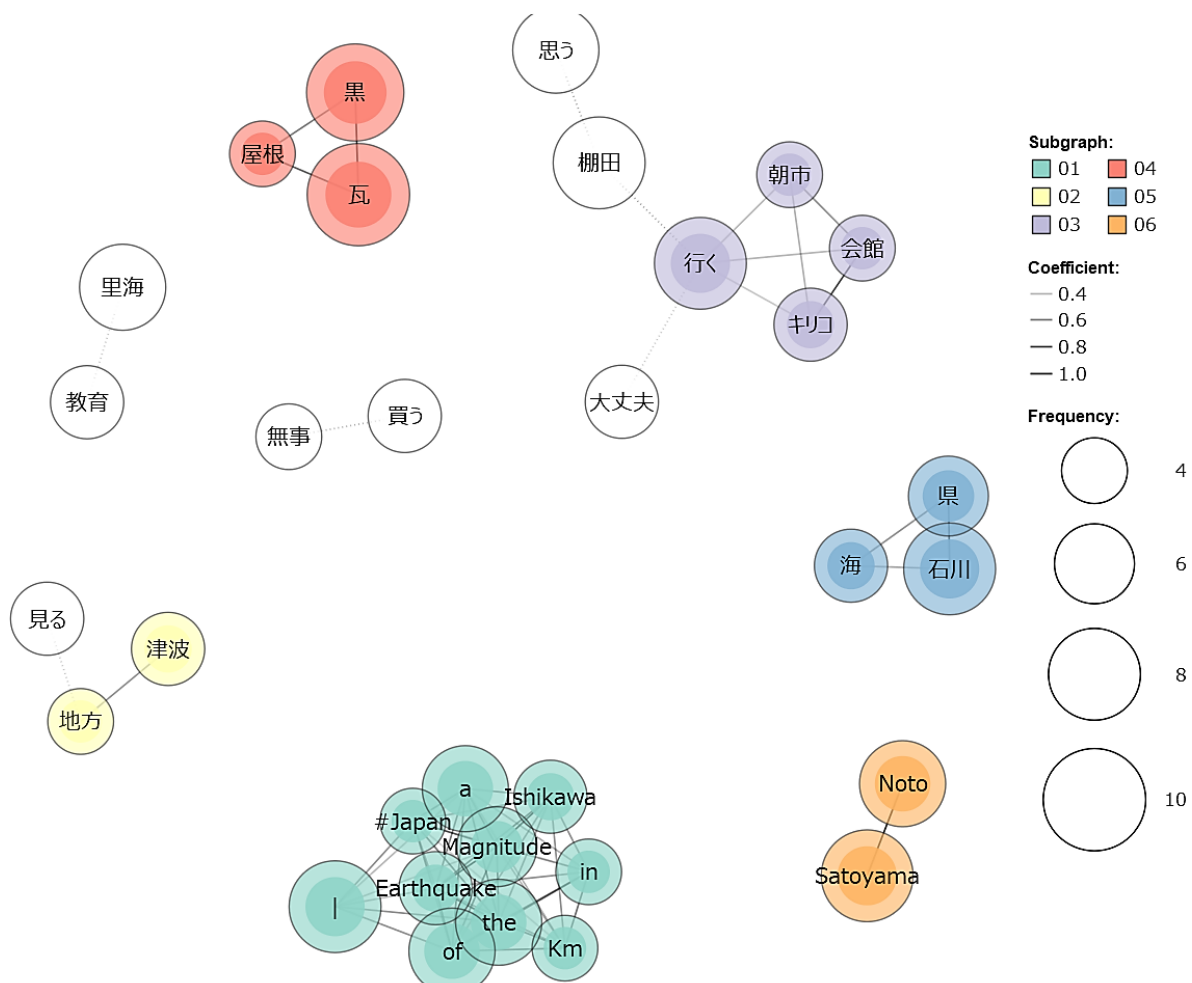
その後、1月10日ごろまでは原点の左側に頻出語が並んでいる。「塩」「珠洲」「輪島」「写真」「美味しい」「朝市」「町」「海」などの語が頻出している。外浜（能登半島北岸）で行われてきた揚げ浜式製塩の手法による塩づくりが、海岸付近の隆起などによって困難化したことが報じられた。また、輪島朝市のおこなわれてきた輪島市河井町において大規模な火災が発生し、大きく景観が変化した。これらの報道を受けて、能登を旅した経験とともに語られた投稿が多いと推察できる。

1月11日～18日の多くは、原点からみて上側から右上側に位置している。「文化」「遺産」「伝統」「祭り」などに焦点があてられている。1月14日付近には、「穴水」町の「ボラ待ち」「やぐら」と「遠藤」

氏に関する投稿が相次いだことがわかる。1月16日頃には原点近くに戻るが、焦点はやや「里海」「里山」「農業」等に移っている。

1月19日以降は、図の右下から右にかけての位置に移動した。この中では、「観光」「地域」「復興」が原点近くに位置している。また、右下のほうに「応援」「復旧」「被災」「生業」「生活」「支援」がみられる。地域とそこでの暮らしをこれからどうしていくかに、関心の中心が移ったことが読み取れる。

以上をふまえ、ここからは1月1日、2～10日、11～18日、19～31日に分けて、共起ネットワーク分析等をおこなう。それぞれの期間の上位の抽出語を抽出語リストで見て、それらの語の共起関係を図化した共起ネットワーク図を作成する。議論は具体的な投稿（ポスト、ツイート）を引用・参照しながらおこなう。



第4図 1月1日の共起ネットワーク

2) 発災日である1月1日

令和6年能登半島地震の発生した1月1日の投稿に絞って抽出語リストを作成した。抽出語の上位出現回数は、「能登」の56回に続き、「地震」「輪島」の各12回、「瓦」「被害」の各10回と続く。

この日の共起ネットワーク図(第4図)をみると、右上に「行く」を中心とした塊がある。ここには、「数年前、能登を旅した。輪島塗りの工房を巡ったり、有名な棚田、能登島水族館等へ行き、加賀屋さんで温泉やカニ等楽しみました。心配です。」「え、あの火災がすごいところって朝市があるところなのね…これまで2回能登に行って朝市でいろいろ買ってめっちゃ楽しかったし、輪島塗のお椀も買って今朝もお雑煮入れて食べたよ…キリコ会館も大丈夫かなあ。火の勢いがすごい…なんとか鎮火しないかなあ??」など、能登観光を思い出しつつ現地の状況を心配した投稿が目立つ。「地震でガッツリ揺れた地域の農業インフラはズブズブやろな 全ての水利と圃場のチェックが終わらんと今年の田植えでけへんぞ? 田んぼの地盤が割れたりしてたら水が溜まらへんしな 能登の棚田もヤバいことになるとるんちゃうか? 同じ百姓として被災地の農家にはなんとかがんばって欲しいと思う」のように、被災地外の自身の境遇に引き付けて心配している投稿もある。

左上の塊の「黒」「瓦」「屋根」は、「石川県は輪島の黒瓦の屋根がとても綺麗で、海と白米千枚田、能登千里浜など景色がとても良いところでした。そこに住む方々の無事と、地震の被害が少ないことを願っています。」「能登は黒瓦の屋根が綺麗な街並みだったんだけど、今回のでだいぶ壊れちゃっただろうなあ」「能登、珠州の方って黒瓦屋根の古い家が多いから倒壊が心配 これから暗くなる 地震も何回も起こってる とにかく身を守って欲しい」「奥能登って黒瓦の住宅が有名だったけど瓦屋根って震度7だと被害受けますよね…」といった投稿からなる。この時点では、黒瓦に覆われた屋根の被災状況を報道等で見たわけではなく、想像している投稿が多い。左下の「津波」「地方」は、石川県能登地方の地震や大津波警報について言及したものである。「石川県能

登地方地震 とりあえずは、大津波警報解除される。しかしながら、津波警報/津波注意報は継続します。むやみやたらに海や海岸や川やため池などは絶対近寄らないで下さい」等である。

下方の英語の塊は、「Aftermath footage of the damage caused on the Noto-Satoyama expressway in Ishikawa after a Magnitude 7.6 Earthquake hit 36 Km North East of Anamizu, Japan」など、マグニチュード7.6の地震が発生して、のと里山海道が不通になった旨などを述べたものである。右下の「Noto」「Satoyama」の大半も、のと里山海道の損傷について述べている。

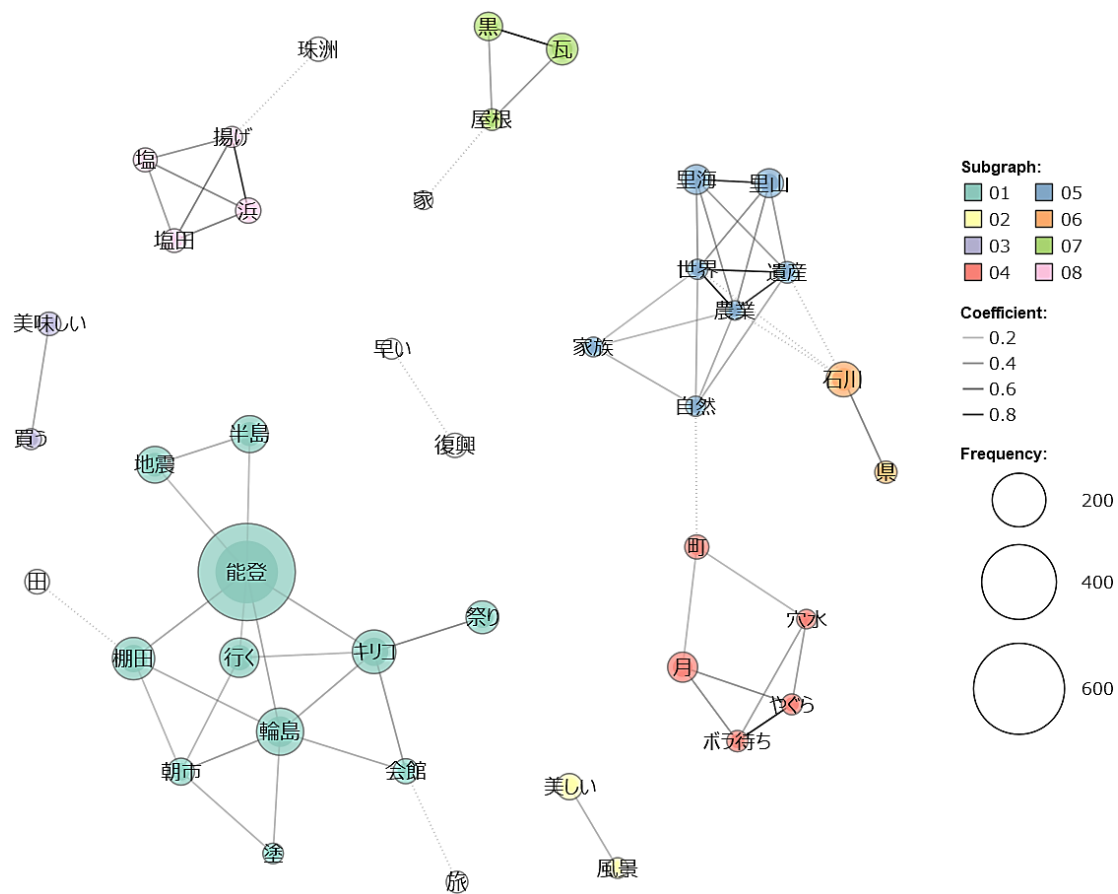
日本語の投稿でも発災直後は、人や物資の輸送路としての「のと里山海道」に、多くの投稿が言及していた。「里山 能登」の検索結果を本稿では対象にできていないが、1月1日などは、「里山」を含む投稿のほぼすべてが「のと里山海道」の状況を心配し把握しようとするものであった。「里山」という語だけで「のと里山海道」のことを明らかに指している投稿も目立った。

3) 1月2~10日

1月2日から10日までの期間の抽出語リストを作成すると、抽出語の上位出現回数は、「能登」の686回に続き、「輪島」の152回、「キリコ」129回、「棚田」121回、「行く」103回などとなった。

この期間の共起ネットワーク図(第5図)をみると、左下に「能登」を中心とした塊がある。出現回数が上位の抽出語は、すべてこの塊に位置している。ここには、「輪島塗が好きで、輪島塗会館や輪島キリコ会館で買って大切にしまっていたお箸はようやくお箸を上手に持てるようになった長女が先月から使っている。」「大学生の頃に2度、生協のツアーで能登に訪れました。珠洲市ではキリコ祭りに参加させてもらったり、地元の方の成人の儀を見学させていただいたり。昔ながらな雰囲気を持つ木造家屋が並んだ懐かしい街並みを今も覚えています」

「能登は2度ぐるっと一周巡ったことがある。海も山も風光明媚そのもの。そこに美しい棚田や朝市と



第5図 1月2~10日の共起ネットワーク

いった人々の暮らしがあり、商売っ気も茶目っ気もないまぜになった優しい魅力に溢れている。思ったより大きい半島なのでまだ観ぬ人情や風景があるはず。だから、また遊びに行きます。どうかご安全に。」など、令和6年能登半島地震の発生によって思い出した過去の能登の旅のことが、多くつづられている。

上方にある「黒」「瓦」「屋根」の塊は、1月1日と同様である。「報道を見ていても奥能登、珠洲の美しい黒瓦に目がいく。家屋はほぼ倒壊してる報道がされてるけれども、素晴らしいと評される奥能登の景観をつくっていた瓦」「バイク旅とレンタカーで2,3回ほど能登の北の方に行った事があるけど、古い建物でも黒瓦がピカピカで重厚で美しい町だった。ニュースに映る倒壊した建物ですら黒瓦は立派な佇まいをしていて、何とも言えない気持ちになる。もう一度美しい奥能登に戻ることを願う。」「石川県、能登の家々の屋根は黒瓦でそりゃ美しいんだ。黒瓦は、『能登瓦』とも呼ばれ、材料に能登の

水田の土を使い、山の薪を燃料にして、七尾市や珠洲市などの農村地帯で生産されてきた。黒あるいは銀黒の美しい釉薬で覆われた能登瓦は、耐寒性に優れるといわれている。」といった投稿がある。

左上の「塩田」「揚げ」「浜」「塩」は、外浜（能登半島北岸）における揚げ浜式塩田での塩づくりを指している。「奥能登の海水で手づくりされるお塩がとてもおいしくて、ずっと忘れられない。江戸時代から伝わる『揚げ浜式塩田』という製法で作られるお塩だそうです。塩田はどうなったんだろう。職人さんご無事でしょうか。胸が苦しい。どうかどうかたくさんの方が助かってほしい。どうか皆さん助かって」「能登といえば日本唯一の揚げ浜式の塩田があるよね。地震や津波の影響はなかったかなあ？」など、思い出や知識を背景に、被害を心配する投稿が多い。

右上には、本稿の主題である世界農業遺産「能登の里山里海」について言及した投稿が抽出された。「能登半島に広がる『能登の里山里海』が【世界農

業遺産】に認定されてる事を忘れないで！ 白米の千枚田、珠洲市の塩田、名舟大祭やキリコまつり、あえのこと等の行事、輪島の朝市…豊かな自然など能登(七尾市、輪島市、珠洲市、羽咋市、志賀町、中能登町、穴水町、能登町)の暮しその物が遺産！ 世界の宝物なのだ！」「世界農業遺産・能登の里山里海。地域活性化として始めた農家民宿群『春蘭の里』は27年。珠洲市、輪島市、穴水町、能登町に60軒。輪島塗での料理や農泊体験で1.2万人。移住者10人も民宿を経営。いますぐ現地へ行くわけにはいかないから、心の中で能登を旅して応援。能登を思うとき」「2011年に世界農業遺産にも認定された自然豊かな能登の里山里海、黒瓦の風景やコミュニティの変化に注目しています。今後の活動も期待し、応援しています」といった具合に、世界的価値や活動の蓄積を振り返り、被災地を応援する投稿が目立つ。なお、「世界農業遺産に選ばれた能登の里山と里海。家族コテージ ノトイエは能登の豊かな自然の中のんびり寛げる温泉付き宿泊施設です」という楽天トラベル関係のbotも反映されている。

右下には、ボラ待ちやぐらに関する投稿が表れている。「特にのと鉄道のと里山里海号は素晴らしい観光列車だった。スイーツが食べられたり、ボラ待ちやぐらなどのスポットの案内があったり、芝桜が美しい能登中島駅ではかつての郵便車の見学もできた。地震に負けず何としてもまた復活してほしい。」「15年ほど前でしょうか、穴水町を観光したことがあります。海が大変に綺麗で、ボラ待ちやぐらが夕暮れに立つシルエットをぼんやり覚えております。頂いた宗玄というお酒が大変飲みやすく、日本酒に馴染みがなかった私にも大変美味しかったことを記憶しています」など、旅の思い出を振り返る投稿が多い。一方で、「ボラ待ちやぐら、生存確認」「遠藤の化粧まわしでおなじみのボラ待ちやぐらは無事でしたよ。」など、地域(穴水町)のシンボリック存在の無事を喜ぶ投稿も見られる。

4) 1月11~18日

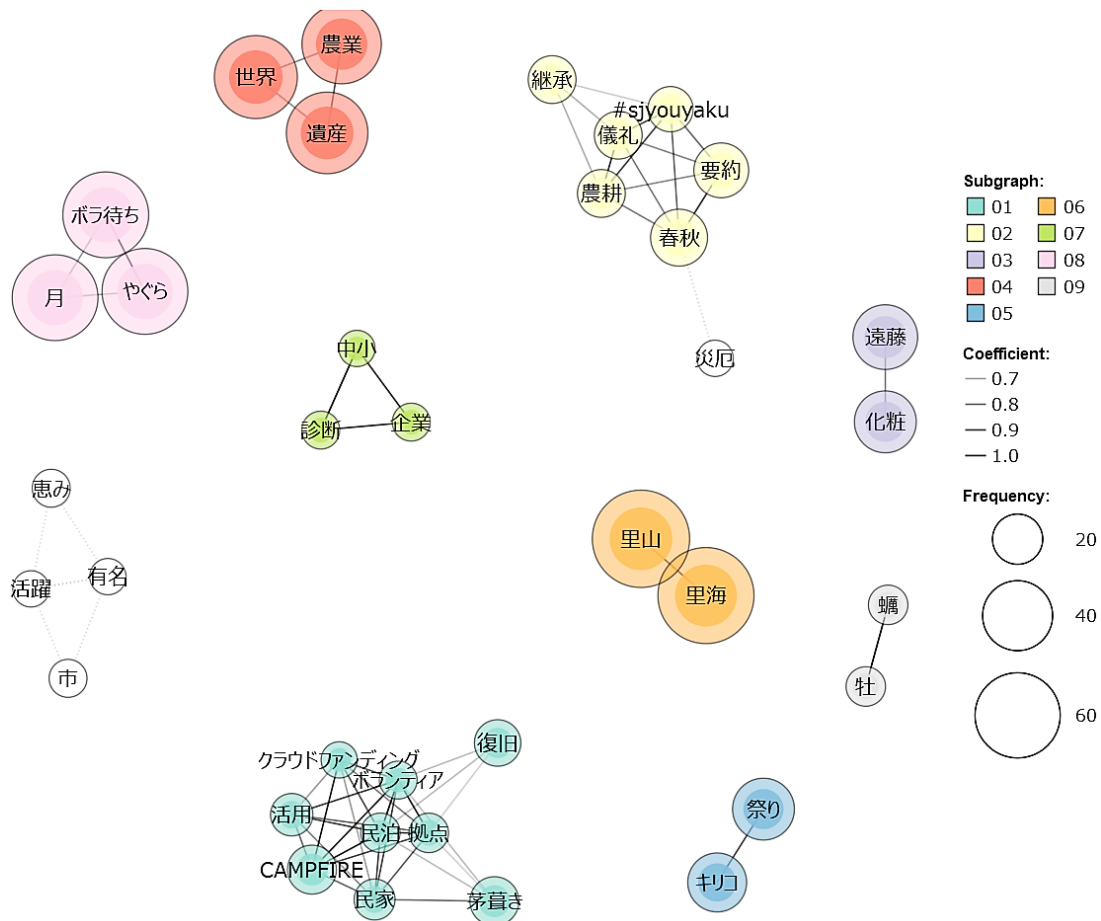
1月11日から18日までの期間の抽出語リストを作成すると、抽出語の上位出現回数は、「能登」の

317回に続き、「里山」の79回、「里海」77回、「やぐら」「ボラ待ち」各61回などとなった。

この期間の共起ネットワーク図(第6図)をみると、「里山」「里海」の塊や「世界」「農業」「遺産」の塊とともに、「ボラ待ち」「やぐら」「月」が頻出語の塊となっており目立つ。確認すると、「1月11日の鳳珠郡穴水町。ボラ待ちやぐら、立っています。遠くに能登島に続く橋が見える。 #ボラ待ちやぐら #穴水町」など、前項同様に地域のシンボリック存在であるボラ待ちやぐらの無事をつづったものがある。

一方で、図の右方にある「遠藤」「化粧」とともに、穴水町出身の大相撲力士である遠藤聖大氏に言及した投稿も数多い。「テレビで遠藤がボラ待ちやぐらの化粧まわしつけてて大歓声が聞こえてなんかじーんとした #大相撲」「遠藤、地元・石川県穴水町『ボラ待ちやぐら』の化粧まわし。久しぶりに見たけど素敵だね」「遠藤のボラ待ちやぐらの化粧廻しをみただけでグッと来た 穴水の避難所ではおそらくテレビも見られてないだろうけど地元で気持ち伝われ！ #大相撲」といった具合である。氏へのインタビュー記事(遠藤 2024)を参照し、「実家から見える海には、伝統的なボラ漁に使う『ボラ待ちやぐら』が立っています。僕の化粧まわしには、この『ボラ待ちやぐら』をあしらったものがあり、初場所でもそれを着けて土俵入りします。テレビの向こうで喜んでくれる人がきっといると思うから。」のように引用した投稿もある。

図の右上にある塊には、「春秋要約」をおこなった投稿が表れている。「春秋要約とは、日経新聞のコラム『春秋』を40字以内でまとめるというトレーニング」(室岡 2020)で、中小企業診断士の二次試験対策やビジネススキルとして文章力を鍛える取組である。「奥能登の『あえのこと』という農耕儀礼は命脈を保ち、厄災を超えて必ずや継承されよう。(句点込み41字) #sjyoyaku #春秋要約 #sjdis #中小企業診断士」「【春秋要約 20240112】奥能登の農耕儀礼は災厄を超え必ずや継承されよう。そしてまた旅人を強く引きつける。(40字) #sjyoyaku」などの投稿がある。



第6図 1月11～18日の共起ネットワーク

左下の塊は、いずれも特定のクラウドファンディングに関する投稿である。「CAMPFIRE で『能登の茅葺き古民家民泊を復旧してボランティア拠点として活用したい』の支援者になりました！」などが見られる。

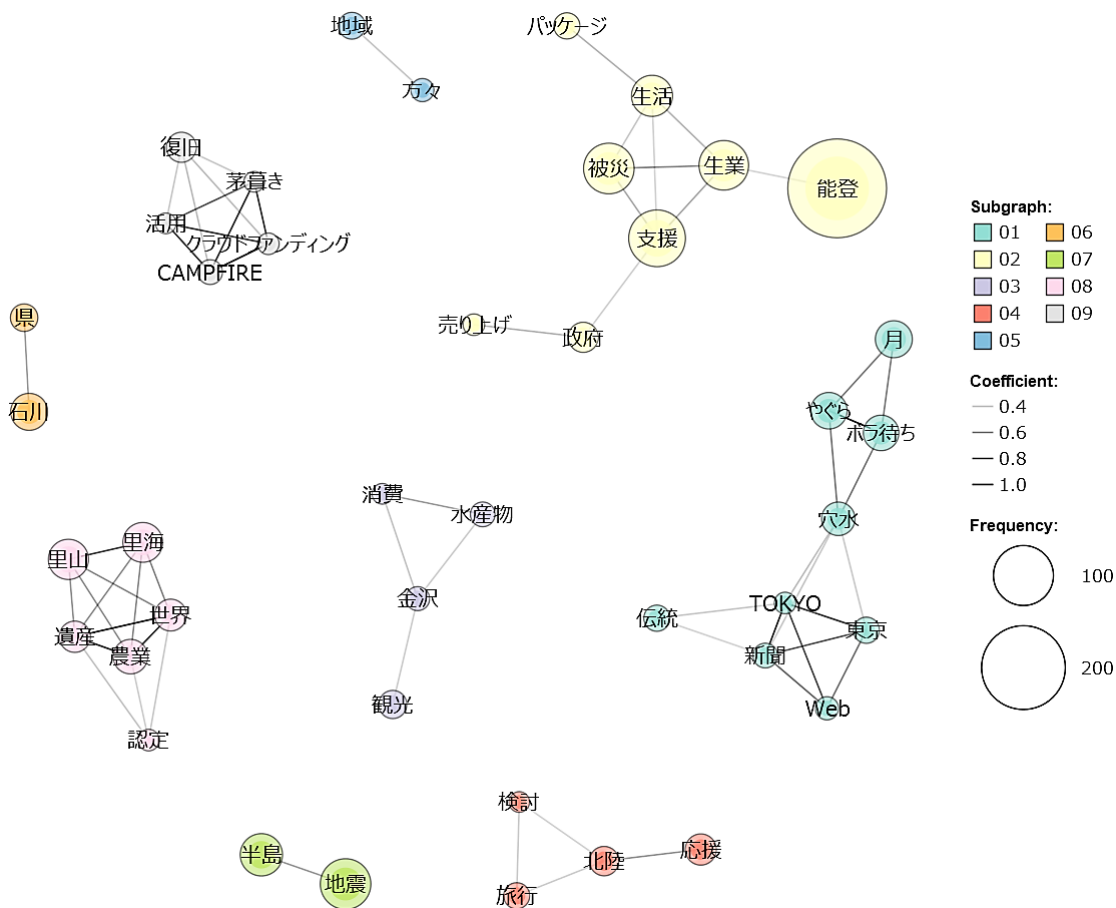
5) 1月19～31日

1月19日から31日までの期間の抽出語リストを作成すると、抽出語の上位出現回数は、「能登」の281回に続き、「支援」の89回、「地震」「被災」各70回、「生業」67回などとなった。

この期間の共起ネットワーク図(第7図)をみると、「能登」に「生業」「支援」「被災」「生活」などが連結した右上の塊が目立つ。これは、「岸田総理は、被災者の生活再建を支援するため『生活・生業支援パッケージ』として1000億円を超える規模の予備費を充てる方針で、今週中にも閣議決定する方針」「首相は25日に被災者の生活と生業の再建に

関する支援パッケージを取りまとめるとしたうえで、『被災者の立場に立って全力で取り組む』と強調した」などとするニュースを大きく反映している。これに関する賛否を交えた議論も多く含んでいる。また、地方自治体の取組に関する議論もある。

ほかに、「輪島で開催した東北の震災復興経験者と能登の被災者が語り合う座談会、たくさんの方にご参加いただきました。自分のところでも開いてほしいとの声があるので、出前座談会をやっていきます。生業の再生、生活の再建、地域の復興など、東北の成功事例と失敗事例を共有できればと思います。」「能登のホテルや旅館でも、今は復旧が最優先で、集客以前の何段階かが必要な施設もあるだろう。また、経営者や従業員が被災者当人であるはずだ。最低限の生活基盤が整うことが喫緊の課題ではないか。でない、生業(なりわい)ですら立ち行かないだろう・・・。」など、今後のあり方をめぐる様々な動きや議論についての投稿もなされている。



第7図 1月19~31日の共起ネットワーク

図の右方には、「ボラ待ち」「やぐら」「穴水」などの塊がある。「興味深いね。>地震に耐えた『ボラ待ちやぐら』 能登・穴水の伝統漁法が『復興のシンボルになれば』:東京新聞 TOKYO Web」など、新聞記事を引用したものが多い。また、「穴水のボラ待ちやぐら。大好きな光景のひとつ。」のように、ボラ待ちやぐらの写真付きの投稿もある。

左下の「世界」「農業」「遺産」「里山」「里海」「認定」には、「世界農業遺産に認定されている能登の里山里海。自然に寄り添い、その恵みをうまく取り入れている暮らしを高く評価されての認定。白米千枚田からは、急傾斜地をしなやかに活用してきた人々の叡知を感じます。能登はすごいんです！ #能登はやさしや土までも #がんばろう北陸 #私の愛してやまない能登」のように、世界農業遺産「能登の里山里海」を被災地としての能登においても重視する姿勢を示した投稿が多い。「チャリティバックのデザイン完成しました！ 能登半島と近江屋洋菓子店が繋ぐ、心を1つにというデザインです

近江屋洋菓子店のイメージカラーの青と世界農業遺産である能登の里山里山カラーで仕上げています まだまだ緊張は続いておりますが、少しでも早く被災された方々が日常生活に戻れるよう祈り、協力させていただきたいと思っております。販売までもう少々お待ちください！」のように、世界農業遺産「能登の里山里海」を地域のシンボリック的存在として位置づけた、新たな動きの創出も見られる。「こしひかり10kg (5kg×2袋) ×3回 石川県 七尾産 | 農業世界遺産認定！「能登の里山里海」で育ったお米お届け」のように、ふるさと納税の案内もある。

右下の「応援」「北陸」「旅行」「検討」の塊は、政府による「被災者の生活と生業支援のためのパッケージ」の一部について言及したもので、「観光復興では『北陸応援割』、能登ではさらに手厚い旅行需要喚起策を検討。朝市の再生も。」「能登地震・北陸旅行代金割り引き・観光支援策『北陸応援割』検討」などが該当する。「寒ブリやウルメイワシ…北陸の水産物、食べて応援 西友が特設売場を開設」と

いったニュースも含む。

中央の「金沢」を中心とした塊には、金沢は水産物の一大消費地です。輪島市の漁師は既に一部が金沢へ移転、能登で生き残った漁港も大半は金沢に魚介類を出荷しています。彼等の生活を維持するためにも、加賀に観光客が来てくれないと困ります。」

「能登の水産物や米、工芸品などは金沢や富山の観光地で主に消費されるからです。買ってもらえば能登の人たちにお金が入ります。」など、能登地域の復興における金沢の役割や、観光・消費のあり方を強調した投稿が目立つ。

IV. おわりに

本研究の目的は、「能登の里山里海」として価値づけられてきた地域資源に対する、さまざまな思いや見方の特徴を、令和6年能登半島地震発生後1か月のSNS上での表現から明らかにすることであった。世界農業遺産として価値づけられてきた主な地域資源を表す語が、2024年1月の1か月間にX(Twitter)上でどのように表現されてきたかについて整理を試みた。

結果として、発災直後には、被災前の現地についての思い出や知識をもとに被災状況を推測し心配する投稿が多くを占めていたことがわかった。その後の10日間ほども同様であるが、被災状況が明らかになるにつれ、地域資源を活かしたこれまでの活動の蓄積を振り返り、被災地を応援する投稿が目立つようになった。同時に、地域のシンボリック存在の資源が無事であった場合や、出身者が地域資源を強く意識して被災地を勇気づけようとする動きに対し、喜びの声もみられた。20日ほどたつと、地域とそこでの暮らしをこれからどうしていくかに、関心の中心が移った。政府による支援策に対する議論や、地域資源をめぐる具体的な動きが活発化してきた。観光や消費のあり方をめぐる議論や方策、クラウドファンディングやふるさと納税などの手段を用いた支援の試みや、応援販売・応援消費の動きもみられるようになった。

上記の結果からは、価値が可視化され、観光の対象ともなり、地域の人々の誇りにもなってきた地域資

源の存在が、厳しい状況に置かれた被災地においていかに大きなものであるかがわかる。「能登の里山里海」とそれを構成する地域資源の一部は既にブランドになっており、地域に思いをもつ関係人口は多い。このことを活かした創造的復興が期待される。

なお、本稿では他の被災地を対象とした同様の既往研究を確認・参照していない。また、個々の地域資源(あるいは検索語)に焦点を当てた分析はほとんどしていないが可能である。むしろそれを行うことで、より具体的な課題と可能性を示すことができるだろう。写真や動画、外部リンクを含む投稿(ポスト、ツイート)とそうでない投稿との特徴の違いをみることもできる。投稿者の属性、特に住所や発信場所、投稿文で扱っている地域などを意識した空間的分析は、XのAPI変更により難しくなっているものの、試みたいものである。どう効率的にX(ツイッター)の投稿を入力・整理しデータベース化するかを含め、今後の課題としたい。さらに、X以外のSNSの投稿の分析も今後の課題である。ぜひ、筆者と同様の関心をもつ方や、効果的な入力・分析手法の技術やアイデアをもつ方と協働したい。

また、本稿の作成時点では、筆者は被災後の能登を訪問しておらず、世界農業遺産「能登の里山里海」の歩みを形づくってきた関係者ともコンタクトをとっていない。地域を歩き、被災者の声をよく聴き関係者と議論し改善を図って、現地の実態をふまえた未来志向の研究を展開していきたい。

注

- 1) 新潟県佐渡市の「トキと共生する佐渡の里山」も同時に認定された。なお、宝達志水町は2013年6月に追加登録された。
- 2) 「世界農業遺産『能登の里山里海』情報ポータル」のページ(「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会 2024a)に「『能登の里山里海』の認定は、以下の点が評価されたことによるものです。」として記されている6つのカテゴリの説明中に出てくる要素を基本に検索語を選んだ。ただし、このポータルサイトの前身のウェブサイト(「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会 2024b)

のほうが各カテゴリの説明が詳しいので、そちらも参照した。なお、本来であれば世界農業遺産「能登の里山里海」の構成資産を検索語にしたいところであるが、構成資産のリストはウェブ上には公開されていないようである。構成資産数は175である(渡邊、2015)が、2010年に地元市町で構成する能登地域 GIAHS 推進協議会が世界農業遺産認定のため国連食糧農業機関 (FAO) に提出した申請書類には、160の構成資産があるという。このうち80事例程度を抽出・整理し、各構成資産の世界農業遺産における価値について文献・ヒアリング・現地調査を行い、整理したものが「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会(2013)である。しかし、これら構成資産のすべてを検索対象とするのは、作業量を考えると難しい。検索語の選定の仕方には改善の余地がありそうである。

- 3) 「KH Coder」は、樋口耕一氏が開発した、社会科学分野などで現在幅広く利用されている計量テキスト分析のためのソフトウェアである。分析から明らかにしたい問いや、比較の枠組み、注目する概念・言葉を、分析間に設定しておく応用研究に実りが多いが、テキストマイニングの手法一般の課題として、分析するテキストの性格や解析結果の意味・妥当性を十分に考察して結論を導き出すことが必要である(仁平・藤田、2017)。

文献

- 荒木祐二・岡村浩美・塚脇真二(2015)：奥能登地域の学校教育における栽培体験活動の現況—世界農業遺産の継承に向けて—。日本海域研究, 46, pp.49-55.
- 池田堯弘・吉田国光(2021)：石川県輪島市「白米千枚田」の維持, 地理科学, 76, pp. 197-212.
- 宇野文夫(2014)：世界農業遺産『能登の里山里海』への金沢大学の貢献, 産学官連携ジャーナル, 10-8, pp.38-39.
- 遠藤聖大(2024)：「駆けつけたい、思いは胸の奥にとどめ」 大相撲・遠藤聖大さん, 中日新聞 2024年1月13日記事,

<https://www.chunichi.co.jp/article/836668> (2024年2月28日最終閲覧)

- 加賀淳一(2021)：世界農業遺産「能登の里山里海」の祭りが直面するコロナ禍—伝統の断絶を乗り越える取り組み—, 農村計画学会誌, 40, pp.22-25.
- 菊地直樹・西村武司・岸岡智也・伊藤浩二・北村健二・山下英輝・森 宏一郎(2021)：能登里山里海マスター育成プログラムによる移住促進に関する調査報告, 滋賀大学環境総合研究センター研究年報, 18, pp.21-30.
- 北村健二・宇都宮大輔・上野裕介(2021)：里山里海を未来につなぐための地域づくり—能登 SDGs ラボの挑戦—, ランドスケープ研究, 85, pp.112-115.
- 桐村 喬編(2017)：『ツイッターの空間分析』, 古今書院, 134p.
- 香坂 玲・内山愉太(2016)：世界農業遺産認定の効果と課題についての一考察—能登地域の事例より—, 農村計画学会誌, 35, pp.361-364.
- 寺島佑樹・柳井清治・堀内美緒・栗野 秀・岩井紀美子・中村浩二(2015)：能登半島里山地帯における河畔景観の変化が魚類相に与える影響, 景観生態学, 20, pp. 117-129.
- 中村浩二・嘉田良平編(2010)：『里山復権—能登からの発信—』, 創森社, 228p.
- 仁平典宏・藤田真文(2017)：特集「テキストマイニングをめぐる方法論とメタ方法論」によせて, 社会学評論, 68, pp.326-333.
- 能登地域 GIAHS 推進協議会(2021)：『能登の里山里海 石川県能登地域 世界農業遺産保全計画(第3期)』, 能登地域 GIAHS 推進協議会, 28p.
- 「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会(2013)：『「能登の里山里海」 世界農業遺産構成資産調査報告書』, 「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会, 169p.
- 「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会(2024a)：「能登の里山里海」の認定, https://noto-giahs.jp/giahs_noto.html (2024年2月28日最終閲覧)
- 「能登の里山里海」世界農業遺産活用実行委員会(2024b)：世界農業遺産 能登の里山里海

- GIAHS Noto's Satoyama and Satoumi, <https://noto-satoyama.com/> (2024年2月28日最終閲覧)
- 橋本 禪・高力千紘・中村省吾・星野 敏・清水夏樹 (2015): 能登半島の社会生態生産ランドスケープ・ホットスポット評価, ランドスケープ研究 (オンライン論文集), 8, pp.31-36.
- 服部浩司・岳野公人・湯地敏史 (2017): 海洋環境保全意識に関する技術科における塩づくり授業実践, 環境教育, 27, pp.40-44.
- 服部浩司・岳野公人 (2019): 中学校技術科における海洋教育カリキュラムの開発と評価, 日本産業技術教育学会誌, 61, pp.115-123.
- 濱本和孝 (2016): 世界農業遺産と日本農業遺産, 農村計画学会誌, 35, pp.357-360.
- 林 紀代美 (2023): 奥能登地域での市場を介さない食品のやり取りの実態と人々の認識, 地域と環境, 17, pp.126-144.
- 松下重雄 (2014): 地域外人材による文化的景観保全の取り組み—能登の里山里海景観を構成する間垣の保全支援活動を事例に—, 日本建築学会技術報告集, 44, pp.263-268.
- 松田 治 (2013): Satoumi (里海) は国際的にどのように捉えられているか?, 日本水産学会誌, 79, pp.1027-1029.
- 松本京子・岳野公人・浦田 慎・松原道男・加藤隆弘・鈴木信雄・早川和一 (2017): 地域に根ざした学校教育活動が子どもの定住志向に与える影響に関する研究, 環境教育, 27, pp.16-22.
- 室岡庸司 (2020): 文章構成トレーニング! 春秋要約のススメ, ランフォワード経営戦略オフィス, <https://run-forward.com/examinee/smec/770/> (2024年2月28日最終閲覧)
- 山下吉明 (2017): 世界農業遺産「能登の里山里海」を活用した国際貢献の取り組みと国際観光への効果, 国際農林業協力, 40-2, pp.2-8.
- 祐岡武志・中澤静男・大西浩明・山方貴順 (2016): 世界農業遺産のESD教材開発の視点—世界農業遺産「能登」と「阿蘇」を事例に—, 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 2, pp.117-126.
- 渡部晃平 (2012): 『里山に生きる仲間たち—人間と生きものが共生する奥能登—』, 能登印刷出版部, 79p.
- 渡邊里菜 (2015): 地域ブランドとしての世界農業遺産「能登の里山里海」の活用における課題—関係主体の連携実態と構成資産別の課題認識に基づく分析—, 京都大学農学部地域環境工学科課題研究要旨集 (平成26年度), https://ocw.kyoto-u.ac.jp/wp-content/uploads/2015/07/2015_faculty-of-agriculture_tiikikankyoukougaku_42.pdf (2024年2月28日最終閲覧)
- Kohmoto, D., Ito, T., Yokoyama, S., and Ichikawa, Y. (2013): Noto Peninsula, a designated GIAHS site: The Japanese Cultural Landscape and New Challenges Arising in Remote Rural Areas. International Geographical Union Commission on the Sustainability of Rural Systems, and the Graduate School of Environmental Studies, University of Nagoya, 21th Annual Colloquium, Commission on the Sustainability of Rural Systems, International Geographical Union "Globalization and New Challenges of Agricultural and Rural Systems" Excursion Guide, International Geographical Union Commission on the Sustainability of Rural Systems, and the Graduate School of Environmental Studies, University of Nagoya, 45p.
- (こうもと だいち・奈良教育大学社会科教育講座)